

ここまで、印刷機を持たないアサヒ精版印刷と、クリエーターたちが持ち込む無理難題をカタチにしていくマリさん（築山万里子さん）の、プリントティングディレクターとしての仕事ぶりを見てきた。

その最後は、マリさんは20代からの付き合いの村上美香さんに登場いただこう。美香さんたちが立ち上げた「株式会社一八八」は、大阪・ミナミの道頓堀にほど近いわい雑な歓楽街の一角に事務所を構える。会社名は、社長を務める美香さんの旦那さんの身長—188センチに由来する。

さわやかな若手クリエーターと共に、エロスを追求する墨絵師の東學さんが窮屈そうに机を並べている。たぶん、やつてることはバラバラ。“放し飼い”という言葉が浮かぶ。そういえばマリさんも、アサヒ精版の先代社長のやり方を“放し飼い”と評していた。縛り付けたって、ろくな発想は出でこないってことだ。

コピーライターという職業柄、美香さんは「言葉のチカラ」を思い知り、信じている。小学生の頃から作文を書くのが好きで、会社勤めをしていた時、転職情報誌で「コピーライター」の仕事を見付けて潜り込んだ。でも得意分野がないのがコンプレックスだった。旦那さんの「根拠のない自信をどんだけ持つかやで」という、まったく根拠のなきえうなドバイスに飛び付き、「私にわからんかつたら、みんなわからんはずや」と開き直つて活路を開いていった。

そんな自信の一端は、一歳下のマリさんに頼つてることころがある。出会った頃はなんとも頼りなく、プレゼンの報告すら満足にできなかつたマリさんが、ギョーカイの荒波にもまれてたくましくなり、いつしか彼女の感性が美香さんのレーダーになつていた。

「この企画、どう思う?」「うーん、ピンとけえへん」「わかつた、やり直すわ」

そんなやり取りから生まれた企画が「マチオモイ帖」だった。



# 「マチオモイ帖」千の色彩

村上美香さんは「しげい帖」に、ミカン畠と両親の思い出などをつづった

2011年、美香さんが故郷の因島（広島県尾道市因島重井町）のイベントを手伝うことになった時、「重井町の“町”を“帖”にして帳面にしたら、自分の思いとかいろんなことを描ける」と思い付いた。自分が生まれた時の両親の思い出や母校の校歌、町の検定問題などをつづった「しげい帖」は思いの外、反響があった。その年の3月、東日本大震災が起き、町が一瞬で津波にのまれ、消えてしまつ光景を目の当たりにして、人々は内なる郷土愛を見つめ直したのかもしれない。

「しげい帖」をみんなで作るプロジェクトをやってみようと思ふんやけど。田舎くさいコンテンツを、大阪の都心で生まれ育つたマリちゃんはどう思つんだろうか？ 答えは「いけるんちやう」。直感ですけど」とマリさんは舌を出すが、その言葉に後押しされてクリエーター仲間に呼び掛け、それぞれの「マチオモイ帖」を作つもらう。プロジェクトが始動した。

美香さんはサイズなどフォーマットをそろえたかったが、マリさんは「バラバラでえんちやう。A4サイズ以内やつたら、どんなのだつてOKにしない？」これが規格をはみ出したがるクリエーター心理を刺激した。

「私も上町のを作りました。自分の町には何もないって思ふけれど、そんなわけないんですよ」と言つマリさんは、「マチオモイ帖」は大きな気付きをもたらしたと感じている。「クリエイント仕事に日々忙しく、自分のことを振り返る余裕のないクリエーターが、これをきっかけに思いがけない自分に出会うんですよ。オカン、オトンとしゃべつて見る町をぶらぶらしてみる、自分と正直に向き合つ。それがマチオモイ帖の面白いところ。優しい輪が広がつていく感じでした」

最初の展覧会には34点。それが9年目の今年は1771点が集まつた。大阪展は今月22～24日、大阪市北区のメビック扇町で開催される。